

ネパール紀行

(株)第一コンサルタンツ 右城 猛

1. まえがき

2001年11月6日と7日の二日間、愛媛大学とネパール工科大学の主催で、地すべり対策に関する国際シンポジウムがネパールの首都カトマンドゥで開催された。これは、来年の3月に愛媛大学を定年退官される八木則男教授の退官記念行事の一環として開催されたものである。

私達は、この国際シンポジウムに出席することと、ネパールの道路事情等を調査することを主な目的に、11月4日から13日の10日間かけてカトマンドゥ、ポカラ、ルンビニ、チトワン国立公園の各地を訪問した。

本稿は、初めて行ったネパールでの私の体験記である。

2. ネパールの概要



図 1 ネパール位置図

私は、ネパールに関する知識をほとんどもっていなかった。そのため、旅立ちの前夜、泥縄式にインターネットで情報を収集することにした。

ネパールの面積は 14.7 万 km²(日本の 1/2.5)、人口は 24 百万人(日本の 1/5)、首都はカトマンドゥ。ネパール人は、ネワール族、グルン族、マガル族、タカリー族など 40 以上の民族からなり、70 以上の言語で話している。公用語はネパール語であるが、多くの人々は英語も話す。最近日本語を話す人が年々増加している。宗教は、ヒンドゥー教を国教としているが、ヒンドゥー教と仏教が融合し、調和を保っている。

GDP は 51.5 億ドル。GDP の約 4 割、就業人口の約 8 割が農業に従事しているため、GDP 成長率はその年の農作物の収穫に左右される。一人当たりの GDP は約 240 ドル(日本の 1/135)で、世界で 4 番目に貧しい国。貧困撲滅が政府の最重要課題の一つになっている。識字率は 36% と低い。貨幣はインドと同じルピー(Rs)。1 ルピーは約 1.7 円。

主要援助国は日本、英、独、米の順で、日本が一番多い。日本からの旅行者は、登山隊やトレkker など 1 年間に 3.4 万人であり、インドに次いで多い。

3. 旅の概要

3.1 日本からの参加者

日本からの参加者は当初 43 名の予定であったが、9 月 11 日にアメリカで発生した同時多発テロ事件の影響等で、参加者は表 1 に示す 35 名となった。このうち、日浦教授夫妻は、一足先にネパールにこられており同席したのは国際シン

表 1 日本からの参加者

所属	氏名	人数
愛媛大学	八木則男・淑子, 矢田部龍一, 横田公忠, 中島淳子, 牧理子・ゆかこ, Bhandary Netra, Kishor kumar Bhattarai, 西村文武	10
鳥取大学	榎明潔・直子, 藤村尚, Binod Prasad, Mainalee	4
山口大学	鈴木素之	1
広島大学	北川隆司	1
高知大学	日浦啓全・由美子	2
日本大学	梅村順	1
岐阜大学	Sherestha Madhusudan B	1
愛媛県	水口公德・恵子	2
地域地盤環境研究所	岩崎好則, 山本浩司	2
(株)第一コンサルタント	右城猛, 筒井秀樹	2
応用地質(株)	上野将司, 大野博之, 利藤房男	3
(株)環境地質	稲垣秀輝, 平田夏実	2
(株)荒谷建設コンサルタント	山下祐一	1
(株)芙蓉調査設計事務所	須賀幸一	1
(株)愛媛建設コンサルタント	神野邦彦	1
吉川エンジニアリング(株)	吉川宏一	1

ポジウムの二日間だけであった。岩崎氏は6日の研究発表後に日本へ帰られた。また、矢田部、横田、中島、上野、利藤、山下、須賀、神野の各氏はポカラ観光後に帰国された。

3.2 旅行の日程

ネパールの訪問先を図2に、日程を表2、図3に示す。

日本からネパールへの直通便は、関西国際空港発カトマンドゥのトリブヴァン国際空港行きのロイヤルネパール航空のみで、週2便運行している。所用時間は約9時間で、途中、上海国際空港で給油のため1時間休憩する。

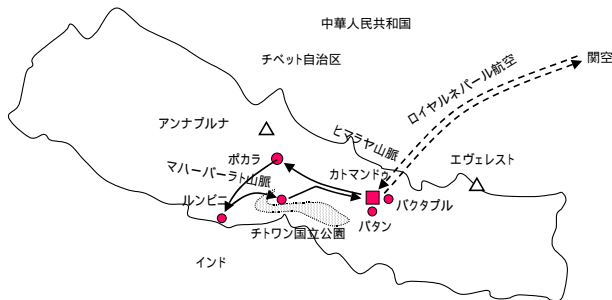


図 2 ネパールの訪問先

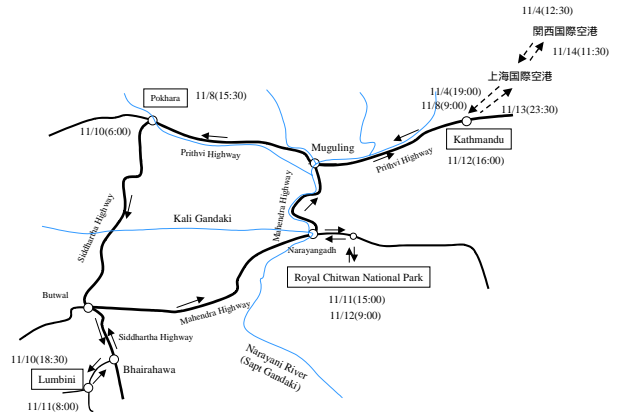


図 3 旅の行程

表 2 旅の日程

月日(曜日)	訪問先(時間は現地時間)	宿泊先
11/4(日)	関西空港(12:30) トリブヴァン国際空港(カトマンドゥ)(19:00)	Soaltree Crowne Plaza
11/5(月)	マウンテンフライト, 観光(スワンヤンプナート, ボダナート, バクタブル, パタン)	
11/6(火)	国際シンポジウム, ツアー夕食会	
11/7(水)	国際シンポジウム, カクテルディナー	
11/8(木)	カトマンドゥ(9:00) ポカラ(15:30)	Shangri-la Village
11/9(金)	ポカラ観光, 昼食会(Bluebird Hotel), 夕食会(Fish Tail Lodge)	Nirvana
11/10(土)	ポカラ(6:00) ルンビニ(18:30)	
11/11(日)	ルンビニ園観光 チトワン国立公園	Chitwan Jungle Lodge
11/12(月)	チトワン国立公園(8:00) カトマンドゥ(16:00), サヨナラパーティ	Everest Hotel
11/13(火)	カトマンドゥ自由行動, トリブヴァン国際空港発(23:30)	機内泊
11/14(水)	関西空港着(11:30)	

4. 国際シンポジウム

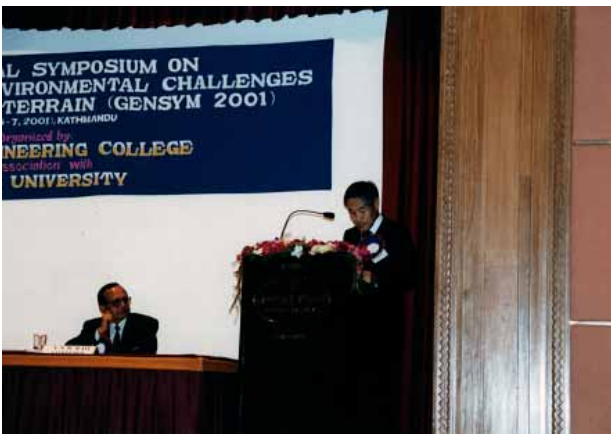
International Symposium on Geotechnical & Environmental Challenges in Mountainous Terrain, 略称 GENSYM2001 と名付けられた国際シンポジウムは、八木則男教授の退官記念事業の一環として、愛媛大学とネパール工科大学の主催で開催された。アジア圏の8ヶ国から約150名が参加し、11月6日と7日の二日間にわたり、57編の論文発表が行われた。日本からも35名が参加し、熱心な討議が行われた。会場は、我々の宿泊先と同じソルティ・クラウンプラザであった。



国王と王妃の写真が飾られた開会式の会場



研究発表の会場



英語で挨拶をされる八木教授



パソコンプロジェクターを用いた榎教授の研究発表

4.1 開会式

開会式は、ホテル内のマラーホールで開かれた。壇上の机の前にはネパール国王と王妃の写真が飾られていた。壇上には八木教授をはじめ5名の代表が並んで座り、順次英語でスピーチされた。

4.2 研究発表

研究発表は、開会式場の隣の部屋で行われた。机の並べ方は学校形式ではなく、コの字型に二重にテーブルが並べられ、テーブルにはコップ、ミネラルウォーター、キャンディーが置かれていた。

研究発表は、基調講演、特別発表、一般発表、ポスターセッションで構成されていた。基調講演は、インド科学研究所のバンガロー氏による「環境地盤工学に関する最近の傾向」と八木教授による「降雨による斜面破壊のメカニズムと予測」であった。特別発表は、広島大学の北川教授、

スリランカのペラデニヤ大学のエデリッシンらによる4編、一般発表は榎教授らによる26編の発表があった。

発表はすべて英語であり、ほとんど理解することはできなかった。「斜面運動の新しい計算法と鳥取西部地震の解析」と題して発表された榎教授の発表は、興味のある内容で事前に研究内容をお聞きしていたので少し理解できた。だいたい、他人の研究など日本語で聞いてもろくに分からないのに英語で聞いて分かるはずがない。

ポスターセッションは、基調講演、特別発表、一般発表がすべて終わった二日目の15時～17時30分、ホテルのロビーとマラーホールを連絡する通路で行われた。発表論文数は16編であった。通路の両側につい立てを並べ、それに持参したポスターを貼って、訪問者に説明することになっていた。筒井君が準備のため14時に来たときには、既にポスターを貼れるスペースは残されていな



ポスターの前に立つ筒井君と筆者(榎先生撮影)



日本語で説明する筒井君, 英語でフォローしている榎先生

かった。事前に、各自のスペースが知らされていたが、実際には予定のスペースが準備されていなかったのである。横田先生は皆に遠慮され、自分の発表を取りやめられた。我々は、須賀さんが確保していたついたてを半分使わせてもらい、何とか準備してきたポスターを貼ることができた。

ポスターセッションに参加した研究者は予想に反して少なかった。何割かの研究者は研究発表を終えて帰られたこと、日本からの参加者はほとんど残っていたが、ポスターセッションの時間帯に別の学会の委員会が開催されており、矢田部教授らかなりの人がそちらに出席していたことによる。

私と筒井君は、現場落石実験結果と落石運動の数値計算法について発表した。この研究に興味を持って集まってくれたのは、八木先生、榎先生をはじめ日本の研究者がほとんどであった。数年前にアメリカのコロラド州とワシントン州を視



ティータイムでコーヒーを飲む筒井君

察したとき、落石事故があっても州に管理責任はなく「アンラッキーでしたね」ですまされる、ということを経験の方から聞いたことを思い出した。道路整備もろくにできていない開発途上国で、落石対策を発表したことがそもそも間違いであった。

4.3 ティータイムとランチ

ティータイムは、午前 10 時頃と午後 3 時頃の 2 回あった。午後のティータイムは 15 分間で、ロビーでコーヒーか紅茶を飲むだけであるが、午前のティータイムにはホテルの中庭のローズガーデンに屋台が並び、昼食かと思われるほど食べ物が出された。時間も 30 分間あった。朝飯から間がないのにこんなものを食べると昼飯が入らなくなるので、クッキーとコーヒーで済ませた。後で分かったのであるが、ネパール人やインド人は基本的に午前 10 時と午後 8 時頃の日二食なのである。このティータイムはネパール人のために用意されていたのである。

ランチは 12 時頃にホテルの中にはあるガーデンレストランで行われた。これもバイキング方式であった。ネパール人やインド人は食べたのだろうか。残念なことにチェックするのを忘れていた。

4.4 開会式と懇親会

閉会式は矢田部教授の司会のもと、研究発表の行われた会場で 17 時 30 分から行われた。その後、



トピーをかぶり閉会式の司会をする矢田部教授



ホテルから眺めたカトマンドウの町

18時30分からホテルプールサイトにある前庭で懇親会（カクテル・ディナー）が開催された。バイク方式であったが、ボーイがまめに酒やつまみを運んでくれたので、料理を取りに行ったのは最初の1回だけであった。

5. カトマンドウ

5.1 カトマンドウ盆地

カトマンドウ盆地は標高 1350m の高地に南北 15km、東西 20km にわたって開けている。かつては湖であったが 3 万年前に周囲の山の一部が崩壊し、水系が変化し、現在の平地になったとされている。エヴェレストホテルの最上階のレストランから見渡せば、平地の周りを緑の山々が取り囲んでお盆の形になっていることがよくわかる。北側

には、万年雪で覆われたヒマラヤを望むことができる。

カトマンドウ盆地には、カトマンドウ、パタン、バクタブルの 3 つの町がある。カトマンドウ盆地の中央を東西に流れる川を隔てた北側がカトマンドウ、南側がパタン。この二つの町を取り囲むように中国の援助金で建設された環状道路 Ring Road が走っている。バクタブルの町はカトマンドウの東方約 5m に位置する。

5.2 カトマンドウの街

カトマンドウの街には赤茶色の煉瓦造りの家が密集し、まるでヨーロッパに来たような錯覚に陥る。しかしながら、街の中に一歩踏み入れると、ホテルの窓から想像したイメージとは全くかけ離れた光景を目にする。

早朝街に出ると、道路脇はゴミだらけで、そのゴミを乞食や野良犬、カラスがあさっていた。夜明けと共に人出が目立つようになると狭い道路をバス、テンプ(小型三輪車)、トラック、乗用車、オートバイ、リクシャ - (自転車の後に座席が付いた乗り物)、自転車が混然と走り回る。そんな中を、神様の化身とされている牛がノソノソと歩いていた。路線バス、トラック、乗用車は、ほとんどがインド製の中古車である。我々の貸し切りバスは、ベンツの中古車を購入して 14 年間経っているという代物であったが、それでも街の中を走っているバスでは一番きれいであった。

路線バスやテンプはどれも超満員である。バスの乗車口から乗客が身を乗り出して走っている光景がよく見られた。車もバイクも数分おきにパー・パーとクラクションを鳴らしながら走っている。信号機は、二箇所にあった。メイン通りの交差点には警官が数人立ち笛を吹いて交通整理をしていたが、余り守られているように見えなかった。交通事故が起きないのが不思議と思っていた矢先に事故が発生した。狭い二車線道路で、我々の乗ったバスと前方から来たバスがすれ違う直前、後を走っていたバイクが追い越そうとし、我々のバスの右側面に接触してバランスを崩し、対向車のバスの側面に衝突して転倒した。2 台の

バスとも一瞬停止していたが、バイクに声をかけることなくそのまま走り去った。

商店街の狭い通りには、トラックやバスは走っていないが、タクシー、テンプ、オートバイ、自転車、歩行者が入り乱れて通行している。日本であれば、間違いなく車両進入禁止になっている。よほど周りに注意しながら歩かないと、追突されかねない。

街の中は車の騒音でうるさい。しかし、10日間も滞在しているとこの音にも慣れてきた。帰国して、信号機にしたがって整然と静かに走る自動車を見たとき、人間の臭いが感じられない不気味さを感じた。不思議なものである。

カトマンドゥの道路はほとんど舗装されている。しかし、道路の両端部は土のままである。このため砂埃がすごい。加えて、インド製のポンコツのディーゼル車が排気ガスをまき散らしながら走り回っている。周囲が山で取り囲まれているの汚染された空気の逃げ場がない。これらのため、大気汚染がすごい。交通整理をする警官は一様に防塵マスクを付けていた。

砂埃と排気ガスが充満する中で、食料、衣料、日用品、みやげ物が路上や店頭で並べて売られている。商品はほこりだらけである。肉や魚も保冷されることなくそのまま並べられている。とても買う気にはなれなかった。

5.3 スワンヤンプナートとボダナート

スワンヤンプナートはネパール最古の仏教寺院。カトマンドゥの街から西へ5kmほど離れた小高い丘の頂上にあり、ブッダの知恵の眼が描かれたストゥーパと呼ばれる塔が、カトマカドゥに住む人々を見渡すように立っている。野生の猿が多いので、モンキーテンプルとも呼ばれている。

ボダナートは、カトマンドゥ市街の東方7kmに位置する。ここは、チベット仏教の聖地とされ、ネパール最大の巨大なストゥーパが建立されている。ストゥーパの周辺にはゴンパ(僧院)やチベットの土産物屋、チベット人の住居が多く、世界でも有数のチベット文化の中心地になっている。





スワンヤンブナートのストゥーパ



スワンヤンブナートのブツダ



スワンヤンブナートの土産店



ボダナートのストゥーパ

5.4 パシュパティナート

カトマンドゥ市街の東部を北から南にガンジス川の支川バグマティ川が流れている。その川のほとりにネパール最大のヒンドゥー教寺院パシュパティナート寺院が建立され、ヒンドゥー教の三大神の一つであるシヴァ神が祭られている。

筒井君と連れだってここを訪れた。タクシーを降りると青年が話しかけてきた。我々のガイド役

をしようという雰囲気であったので、彼の案内に任せることにした。

バグマティ川の周辺は観光地になっており、入場料75ルピーで入ることができる。100ルピーを差し出すと返ってきたお釣りは20ルピーであった。足りないと言句を言うと、帰りに返すと言った。猫ばばするに違いないと疑っていたのだが、帰りに立ち寄ると意外にも約束通り残りの5ルピーを返してくれた。

パシュパティナートの横を流れるバグマティ川には2本の橋が架けられていて、川の右岸に橋を挟んで上流に2基、下流に6基のアルエガートと呼ばれるコンクリートで造られた火葬台がある。その内の3基で火葬が行われていた。丸太を井形に積み重ね、その上に死体を乗せ、親族の一人が長い棒でひっくり返しながらかき回して焼いていた。火葬の背後では、それぞれ十数人が座って眺めていた。死者の親族や友人のようである。火葬台の横の階段状になった護岸では、髪の毛を剃る子供と老人の姿があった。死者の親族の代表が身を清めているのだろうか。

自分が焼かれている場面を想像してゾッとした。しかし冷静に考えれば、家族や友人が見守る中で時間をかけてゆっくり火葬される方が幸せであり、残された家族も絆を深めるに違いないと思えた。

対岸の斜面にはエックイダス・ルドゥラと呼ばれる小さな祠(ほこら)が11棟建てられており、中に四角い台の上に丸い突起の付いた石臼のようなものが設置されていた。これはシヴァリングと呼ばれるもので、突起はシヴァ神のリング(ペニス)、石臼状のものはカーリー女神のヨーニ(ヴァギナ)で、シヴァ神とカーリー女神が性交している様子を抽象化している。これを見て、シヴァ神が生殖神であるということがやっと理解できた。日本にも性器をご神体として祭った神社があちこちにあるが、ルーツはヒンドゥー教にあるのかもしれない。ご本尊を拝顔したいと思ったが、寺院の中に入れるのはヒンドゥー教徒に限られるということであった。

パシュパティナート寺院の参道には、お供え物の花やみやげ店が軒を連ねている。また、汚い衣類を身にまとい、痩せこけた乞食がたくさん並んで座っていた。痩せ方は異常である。足に肉はほとんど付いていない。10ルピー渡して写真を撮らせてもらった。



バグマティ川の畔アルエガートで火葬が行われている



写真右手に並んだ小さな祠がエッカイダス・ルドウラ



シヴァリンガ



パシュパティナート寺院の入り口



痩せこけた乞食



マザーテレサが建てたホスピタル



シヴァリンカの周りで食事をする入院患者



ボダナートのダルバール広場



トウマディー広場の物売り

パシュパティナート寺院の近くに、マザーテレサが建てたというホスピタルがあった。その中庭の真ん中にもシヴァリンカが設置され、周りで入院患者がダルバートを食べていた。ダルバートとはネパールの普通食で、豆のスープ（ダル）とご飯（バート）と野菜のカレー（タルカリ）からなる料理である。これを右手の指先で混ぜて口に運んで食べるのである。

ホスピタルの中には、細長い部屋にベッドが二列並べられ、食事を終えたか食欲のない患者かわからないが、ベッドに座って休んでいた。日本では考えられない不潔な病院である。写真撮影した後で気が付くと、壁に「写真を撮るな」と英語で書かれていた。

パシュパティナートを一通り見終わったのでガイドをしてくれた青年に「ありがとう」とお礼のみを言って別れることも考えたが、それでは少しかわいそうと思い「How much?」とたずねると、「10ドル」と吹っ掛けてきた。筒井君とそれぞ

れ1ドルずつわたして、「Thank you. Good by」と言って別れを告げた。

5.5 バクタプル

11月5日、ボダナートを見学した後、バクタプルを訪れた。ライオンゲートと呼ばれる正門をくぐるとダルバール広場に出る。カトマンドゥ、パタンにもダルバール広場と呼ばれる広場があるが、ここの広場が最も広々としていた。

広場の北側には12世紀のマッラ王朝時代に建てられた王宮がある。ゴールデンゲートと呼ばれる金の門をくぐり抜け、中庭に沿って歩くとタレジュ寺院があるが、ヒンドゥー教徒以外は入れない。ツアー仲間の二人が写真を撮ろうとしたとき、鉄砲を肩に掛け寺院の入り口にいた衛兵が飛んできた。写真撮影が禁止されているのである。中庭をさらに奥に進むと、コブラをデザインした噴水のある浴場跡があった。



王宮のゴールデンゲート



ナヤタポラ寺院



王宮の浴場跡

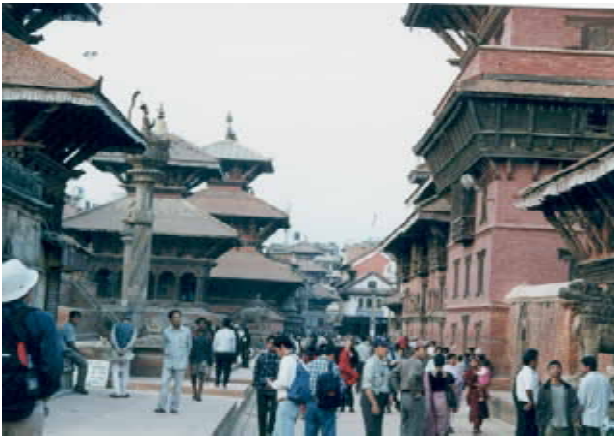


寺院の屋根を支える方杖の彫刻(性交する男女)

王宮の中庭を東に抜けるとトウマディー広場に出た。ここには、高さ 30m の五重塔がある。これは 18 世紀初めに建てられたナヤタポラ寺院。正面の階段の両側には、象，獅子，グリフィン，女神の石像が守護神として一対ずつ置かれている。その他にも広場の周囲をたくさんの寺院が取り囲んでいる。1934 年の大地震の前にはもっと多くの寺院があったようである。

5.6 パタン

11月5日の最後の観光地であるパタンは、バグマティ川をはさんでカトマンドゥの南に位置する。この町の住民は、ほとんどがネワール族で、仏教徒と言われている。仏像や木彫り、タンカを描く職人が多いようである。



パタンのダルバー広場



旧王宮の一階



クリシュナ寺院



旧王宮の二階

パタンのダルバール広場には、17世紀のマッラ王朝時代に建立されたとされる4階建てのユニークな石造寺院がある。クリシュナ寺院である。二階にクリシュナ、三階にシヴァ神、四階にブッダが祭られているというから面白い。

広場に面した東側には旧王宮がある。中に入ると、広い中庭がありその周囲をレンガ作りの二階建て建物が囲んでいる。よく見ると建物の一階部分の出入口がいずれも変形していた。1934年の大地震で被害を受けたのであろう。

パタンのダルバール広場でもいろいろな土産物が売られていたが、ここの物売りが最もしつこかった。

5.7 エヴェレスト体験ツアー

ヒマラヤ Himalaya はサンスクリット語の hima(雪)と alaya(住居)の合成語で「雪の家」を意味する。今から1億年前、インドの半島部はアフリカ大陸の一部であった。インド亜大陸を乗せたインドプレートがアフリカ大陸から離れ、アジア大陸の方向へ移動し、ユーラシア大陸にぶつかった。インドプレートはユーラシア大陸を持ち上げ、7000万年前にアジアの南西部にチベット高原を造った。その後もインドプレートはユーラシア大陸の下に潜り込み続けたため、チベット南部が盛り上がり、ヒマラヤ山脈が形成されたとされている。

ネパールに着いた翌朝(11月5日)ヒマラヤ山脈を間近に見るマウンテンフライトに参加するため、5時10分に集合場所のホテルロビーに降りた。約束の時間は5時30分であったが、旅行会社 Nepal Vision Trecks & Expedition 株式会社の Kumav Rupakheti 氏とネトラと一緒に現れたのは



ブッダエアの小型飛行機 Beech 1900D



コックピットから眺めたエヴェレスト

5時50分頃。ネパールで20分程度は遅れたことにならないのである。

カトマンドゥ空港からブッダエアの小型飛行機 Beech 1900D に乗って、標高 6000~8000m 級の山々が連なるヒマラヤ山脈の南側を西から東へ高度 2500 フィートで世界最高峰エヴェレストまで飛行し、引き返すものである。ピラミットの形をした山が標高 8848m のエヴェレスト。この 10km まで接近し、尾根の形、イエローバンドを鮮明に見ることができた。小さい窓からの眺望は、主翼が邪魔をし、窓ガラスが汚れていて十分ではなかったが、交代でコックピットから眺めることができ、満足できるものであった。フライト時間は1時間、費用は115ドル(15,000円)であった。

5.8 日本食のレストラン

ガイドブックを見ると、カトマンドゥには日本食のレストランがいくつかある。ネパール滞在最後の13日、タメル地区にある「味のシルクロ-

ド」で昼食を、ホテル・サンセットビューの中にある「ヒマラヤそば処」で夕食をとった。

「味のシルクロード」は、オーナーが日本で25年間コックとして修行したというだけあって、その味付けは本物。値段が安いのも魅力的。トンカツ定食が、みそ汁、漬け物付きで130ルピーであった。店には単行本、雑誌、漫画本、衛星で送られてきた日本の新聞が置かれていた。また、落書き帳もあり、この店を訪れたたくさんの日本人観光客がネパールの印象を綴ってあった。

「ヒマラヤそば処」は、1996年1月から10月まで長野県の戸隠村で修行を積んだという青年が料理を作っている。そば粉には、ホテルのオーナーの出身地であるムスタン郡ツクチェ村(標高2600m)産のものを使っているとのことであった。私は、かけそばセットを注文した。そばの唐揚げ、そば団子、天ぷらそば、かけそばとそばづくしで、ゆうに二人前はあるボリュームであった。

ネパールにきて、ずっと腸の調子が悪かったのであるが、昼、夜と続けて日本食を食べたおかげで腹の調子が回復した。

6. ポカラ

6.1 ヒマラヤ山脈とシャングリラ・ビレッジ

ポカラは標高 850m の盆地に開けた町。その地名は、池を意味するネパール語 Pokhari ポカリからきている。ポカラにはいくつかの湖があるが代表的なのはペワ湖。

ポカラの目玉は何と行っても標高 8000m 級のヒマラヤを間近に見えるところ。我々の泊まったシャングリラ・ビレッジ Shangri-la Village は、その名前の通り、まさに「地上の楽園」であった。アンナプルナサウス(7219m)、アンナプルナ(8091m)、マチャプチャレ(6993m)、アンナプルナ(7555m)、アンナプルナ(7525m)、アンナプルナ(7937m)、ラムジュン・ヒマール(6986m)がどの部屋からも一望できるロケーションにあった。

真っ白な万年雪に被われたヒマラヤ山脈は実



ダンブスの山頂から見た日の出



ダンブスの山頂から見た農村の風景



ダンブスの山頂から見たマチャプチャレ



シャングリラ・ビレッジのテラスから見たヒマラヤ

に美しい。その中でも特に美しいのが、ポカラのシンボルと言われるマチャプチャレ。真っ青に澄み切った空を突き刺すようにそびえ、ヒマラヤ山脈の中で最も高く見える。他の山に比べてポカラからの距離が近いためである。マチャプチャレとは「魚の尻尾」の意味があるということをガイドのハリーさん、ホテルの前で客引きをしていたタクシーの運転手から教わった。ポカラの反対側から眺めると、山の頂上が二股に分かれており、魚の尻尾のように見えるらしい。

11月9日、日の出を見るため4時30分ホテルをバスで出発し、ポカラから約20km北東にあるダンブスの山頂に登った。暗闇の中から日の出と共にヒマラヤ山脈が徐々に姿を現し、6時頃、東の空が赤く染まってくるとマチャプチャレも鮮明になり、東斜面が赤く染まった。ポカラよりもヒマラヤを間近に見ることができたが、手前の山

が視界を妨げロケーションとしては、いまいちであった。太陽が登れば気温があがって水蒸気が発生し、これが上昇気流に乗って雲となり、ヒマラヤ山脈を被う。このため、日の出から10時頃までが見頃である。

ホテルの部屋の前には広いテラスがあり、各部屋から自由に出入りができるようになっていた。テラスに置かれているリクライニングの椅子に仰向けに横たわり、正面のヒマラヤを眺めていると心が癒される。ここに別荘を建てて住むことができればストレスなど無縁で長生きできるに違いない。

シャングリラ・ビレッジには2泊した。各部屋にはローソクが1本置かれていた。夕食後、八木先生を中心に榎先生、矢田部先生らと共に数人がテラスに集まり、満天の星空の下でローソクを灯し、八木先生がエディリシンから土産にもらった



ペワ湖



ネパール工科大学理事長からスカーフをプレゼントされた八木夫人



ペワ湖近くのTシャツを売る店



トビーをいただく筆者。理事長が着ているのはマエルボース，婦人が着ているのはサリーで，ネパールの国民的衣装。



タンカを描く青年

というジン，それに筆者が関空を飛び立つ前に仕入れてきたオールドパーをみんなで飲みながら夜更けまで語り合った。旅の楽しい思い出となった。

6.2 ポカラ観光

ポカラでは，ビンドゥバシニ寺院，マヘンドラ洞窟，キエアイシン橋，ペワ湖などを観光した。マヘンドラ洞は鍾乳洞の洞窟。幅は3m位あるが

全長は50m程度。照明がないため中は暗く足下が見えない。天井から無数に垂れ下がる鍾乳石を期待していたが一本もなし。泥棒によってすべて根元から切り取られていた。磨けば高く売れるそうである。

観光地として最も賑わっているのはペワ湖とその湖畔。ペワ湖にはレジャー用のボートがたくさん浮かんでいた。湖畔には，土産物屋，タンカ専門店，銀行，旅行代理店，書店，トレッキング用品店，ホテルなどが建ち並び観光客でにぎわっていた。ネパールの観光地はどこに行ってもアンモナイトや三葉虫の化石を売っている。これがよくとれるのはポカラを流れるセティ・ガンダキ川のように，化石を探して河原の石を割っている光景をよく見かけた。



ブルバードホテルの前で記念撮影



ブルバードホテルでのランチ風景(榎先生撮影)

6.3 ポカラでの食事

ポカラでの二日目、以前に文部大臣をされたというネパール工科大学の理事長が、ブルーバードホテルでツアーの全員にランチをごちそうしてくれた。そして、その後で、男性には絵柄模様のトピーを、女性にはスカーフをプレゼントしてくれた。



チベットの民族舞踊

ポカラ最後の晩餐会は、フィッシュテイル・ロッジ。日本の皇太子も宿泊されたという由緒あるホテル。ここは、ペワ湖の対岸にあるので、ドラム缶を並べて板を張った筏に乗って渡った。食事の前にチベットの民族舞踊を見た。チベットの民族衣装を身につけた若い男女が民族楽器を演奏しながら踊るのであるが、あまり上手とはいえなかった。踊りの最中に、持っていたククリ(ネパールの岩)を誤って投げ飛ばすというハプニングも



リクシャーが多いルンビニの町

あった。本物でなく木製のククリであったのが幸いであった。

ホテルのレストランは円形のコテージ風の建物で、中央に暖炉があった。その周りに座り、暖炉の火を見つめていると心が癒される。明日は、矢田部先生、横田先生、中島さんの愛大組や上野さん、山下さん、須賀さん、神野さんらが一足先に日本へ帰るので、この晚餐会はお別れパーティーを兼ねていた。

7. ルンビニ

7.1 ルンビニ

ルンビニは、ゴータマ・シッダールタ(お釈迦様の名前、ブッダ)の生誕地。インドとの国境近くに位置している。インドにある成道の地ブッダ・ガヤー、初めて説法したサルナート、入滅の地クシーナガルと並んでブッダの生涯にちなむ4大聖地の一つとされ、仏教徒の巡礼地となっている。

ネパールは山岳地形の国と思っていたが、インド国境に隣接する南側には広大な平野が開け、稲作が行われている。大型の耕運機もたくさん見られ、農民の生活は山岳地帯に比べて格段に裕福そう。

気候は熱帯に属し、我々が訪れた日は最低気温 13°C 、最高気温 32°C であった。夜や朝方は寒いですが、日中はTシャツ一枚でも暑い。気温差が 20°C 近くもあるため、体温の調整ができず風邪を引



ブッダ像が祭られた仏塔



ブッダ像

いてしまった。

街は人で溢れ、自転車(三輪車)の後に二人乗りの座席が付いたリクシャーと呼ばれる乗り物が所狭しと走り回っている。観光客だけでなく、地元の人々もタクシー代わりに使っている。

7.2 ルンビニ園

ルンビニの目玉は、ブッダ生誕地のあるルンビニ園。丹下健三によるマスター・プランの基に現在開発が進められている。ルンビニ園の面積は聖園地区、寺院地区、新ルンビニ村の3つのゾーンから形成され、総面積は 7.68km^2 におよぶ。聖園地区には、2500年前ブッダの母マヤーがブッダのお産の折りに枝をつかんだと言われる菩提樹、産湯に使ったプスカリニ池、マヤー聖堂跡、アショカ王の石柱などがある。

聖園地区に入るには入場料をとられるが、それ以外にカメラやビデオを持ち込むと撮影料もとられる。撮影料は、普通のカメラが15ルピー(1ドル)、ビデオカメラ(個人的使用)が200ルピー



ブッダが産湯に使ったプスカリニ池



聖園地区の平和の火



日本山妙法寺

(10 ドル)、コマーシャル用の場合は 5000 ルピー (500 ドル) と非常に高い。

マーヤ聖堂跡地から 1899 年に発掘されたブッダ生誕を描いた石像、およびその復元像が、新しく造られた仏塔内に安置されている。右手で木の枝を握っているのがブッダの母マーヤー、その右下の蓮華の台座に立っている小さい子供が

誕生したばかりのシッダータ王子(ブッダ)、回りにいるのはブッダに水を注いでいる天人達である。

聖園地区の北には平和の火 Eternal Peace Flame が燃え続けている。そこから真北に向かって一直線に伸びる運河が計画されているが未完成である。この運河の両側が寺院地区で、各国の寺院が建造されることになっている。現在完成しているのはミャンマー寺、ネパール尼僧院、中国寺、日本寺のみである。

ガイドのハリーさんは、日本寺が最も立派と言っていたが、それは日本寺院とはとても思えない白色の仏塔であった。その横に、日本山妙法寺と書かれた建物があり、若い僧侶が二人いた。その僧侶によると、この仏塔は日本山妙法が建てたもの。日本山妙法は信者数約千人の小規模な日蓮宗の布教団体であるということであった。ポカラの地図を見たとき日本山妙法寺というのがペワ湖の北側にあったことを思い出した。小さな宗教団体がネパールに二つも寺院を建てるのがなぜできるのか不思議である。

ここは、金さえ出せば誰でも寺院を建立できるようである。しかし、ここを訪れる世界の人々に、このような寺院が日本の伝統的寺院と誤解されてはたまらない。

ルンビニ村地区には、日本のホテルチェーン法華クラブが経営するルンビニ法華ホテル Lumbini Hokke Hotel が建てられていた。法華クラブは倒産したはずであるが、経営者は変わっているのだろうか。

8. チトワン

8.1 チトワン国立公園

ネパールには7つの国立公園がある。そのうちのひとつが中央ネパールのタライ平原にあるチトワン国立公園 Royal Chitwan National Park。東西 80km、南北 23km におよぶ広大な面積を有している。



ラブティ川の浅瀬を走るジープ



かやぶき屋根のレストラン(榎先生撮影)



ジープに乗った筆者ら(榎先生撮影)



筒井君の部屋でかなり酔った八木先生と筆者(榎先生撮影)

かつてタライ平原一帯は亜熱帯の植物が生い茂るジャングルであって、ゾウ、トラ、サイなどの多くの野生動物が棲んでいたが、ジャングルを耕地に開発する大プロジェクトのためジャングルのほとんどは消失したようである。

チトワンはゾウを使った狩猟地であったため、開発を免れた。1973年にネパール最初の国立公園に指定され、1984年にはユネスコの世界遺産にも登録されている。

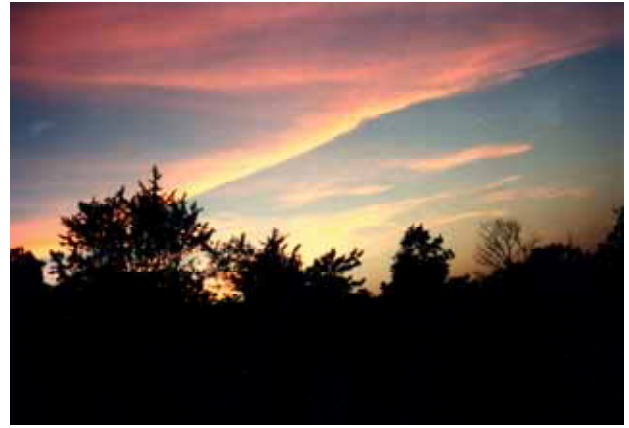
8.2 ホテル

チトワン国立公園内には6軒のホテルがある。我々が泊まったのは、国立公園の北端を東西に流れるラブティ川の近くのジャングル内に建てられたチトワン・ジャングルロッジ Chitwan Jungle Lodge。

マヘンドラ・ハイウェイを東向きに走ってきた

バスをバハンダラで降りてジープに乗り換え、そこから狭い凸凹の農道を南下し、ラブティ川の浅瀬を渡り、ジャングルをくぐってホテルに到着した。ここでは、自家発電されているものの、ホテルの部屋に電灯はなく、各室に1個のランプが置かれているだけであった。風呂にはバスタブはない。シャワーがあったが、いくら待ってもお湯は出てこなかった。

夕食の後、筒井君の部屋へ八木先生、榎先生も来られ、地盤工学や最近の土木技術者に関する問題点をランプの灯りを囲みウイスキーを飲みながら楽しく議論した。八木先生が帰られた後、ネトラ氏が加わり人生論や将来の夢を語り合った。想いで出に残る一夜となった。



エレファント・サファリーで見た夕焼け



象に乗ってジャングルを探検



ジャングルの中には巨大な蟻塚が多い

8.3 エレファント・サファリー

エレファント・サファリーとは、ゾウの背中に取り付けられた四角い鞍に4人が乗り込み、鞍の4隅に設置されたポールを各人が内股で挟むように足を垂らして座り込み、2時間かけてジャングル内を探検するものである。ゾウが歩くと鞍が揺れ、衝撃が体に伝わってきた。この状態で2時

間も我慢できないのではと思ったが、少しするとゾウのリズムに体を合わせることができるようになり、苦痛はなくなった。

サファリーに参加する条件がいくつか付けられた。動物に目立つ赤、白、黄色の衣類は避けること、大きな声を出さないこと、ズボンのポケットに落ちたら困る貴重品は入れないこと。

私たちのグループが目撃した動物は、イノシシ、シカ、クマだけであった。グループによって異なり、この他にサイを見た、見えたのはイノシシとシカしかだけであった、などいろいろであった。餌付けをしているわけではないので、広大な公園で動物と出会えるチャンスはめったにない。ジャングル内には至る所に巨大な蟻塚が見られた。

ゾウはよく訓練されていた。同乗していた吉川氏が、被っていた帽子を後に落とした。このことを前に乗っているゾウ使いに伝えると、ゾウが振り返って長い鼻で帽子を器用に拾い上げてくれた。

8.4 ジャングル・ウォーク

いつものように朝の4時頃目を覚ました。ネパールと日本の時差が3時間15分あるので、日本時間の7時15分に相当する。すると、ポトポトという雨音が聞こえてきた。ネパールにきて初めての雨かと思って外に出ると満天の星空であった。ホテルがジャングルの中にあるため、霧が水滴となって木の葉に付着し、それが集まって雨のように屋根に落ちる音であった。生まれて初めて

の経験であった。 ジャングル・ウォークは、まだ薄暗い朝の6時にスタートした。二人のネイチャー・ガイドに案内されて、ジャングル内を約45分かけてウォッチングするのである。至る所にゾウの巨大な糞が落ちていたので足下に注意して歩かないと大変である。

どんな野鳥を見ることができるとか楽しみであったが、ほとんど目にする事ができなかった。ガイドが、クジャクがいるといったが、これも一瞬であったため確認することはできなかった。藪の中で鹿の死骸を見つけた。トラが食べたあととのことであった。

8.5 タルー族の踊り

夕食の後、広場でタルー族の民族芸能が披露された。タルー族とはタライ平原全域に分布する民族で、その人口は40万人と言われている。地元の青年グループが、白のブラウスに白い膝丈のスカートという民族衣装を身につけ、民族楽器を演奏しながら踊るものである。その一つに、細長い棒を持ち、お互いに打ち合うスティックダンスという踊りがあった。

これは、高知市介良の朝峯神社のお祭りで見られる「棒打ち」という踊りに極めてよく似ているのには驚いた。朝峯神社のお祭り参加すると、白粉を指で額につけられる。これは魔除けのお呪いであるが、これもヒンドゥー教徒が神の恩恵を得るため赤い粉を水で溶かして額につけるティカとよく似ている。朝峯神社は安産の神様で、ご神体が女陰石であるが、性器をご神体としているところもシヴァ神と共通している。

9. 印象に残ったネパールの人々

9.1 カトマンドゥ空港の検査官

11月5日の朝、マウンテン・フライトのためカトマンドゥ空港に行った。X線検査の入り口で、検査官からライターを持っていないかという質問を受けた。ポケットに入れてあった百円ライターを差し出すと、黙って取ってしまった。一緒に



タルー族のスティックダンス

フライトした山本氏も同様の質問を受け、ライターを渡したとのことであった。

このことをネパール出身のネトラ氏に話すと、乗客からライターを巻き上げているのだと言うことであった。ネトラ氏は、検査官に太股をつかまれたそうである。これは、ネトラ氏がツアーの引率者だと見て、金をよこせと合図をしてきたとのことである。ネパールの議員や公務員は賄賂を要求する人が多いと聞いていたが、その一端を垣間見る思いがした。

9.2 ホテルのキャッシャー

カトマンドゥの五つ星の高級ホテル、ソアルティエー・クラウン・プラザでチェックアウトした時の話。キャッシャーから示された料金は、日本への4回の電話代とそれに対する税金でトータル52ドルであった。20ドル札を3枚渡したつもりであったが、キャッシャーが数えているのを見て4枚渡したことに気が付いた。当然、余分に渡した1枚を返してくれるものだと思っていると、平然と20ドル札4枚全部を金庫にしまい込んで、お釣りとして8ドル返してきた。20ドル札をミスで1枚余分に渡したことを告げると、何食わぬ顔をして金庫から取り出して返却してくれた。ネパールでは油断も隙もあったものではないと思い知らされた。

9.3 タクシーの運転手

11月9日、宿泊先のエヴェレスト・ホテルが

ら鈴木先生，山下氏，それに筒井君と小生の4人がタクシーに便乗してタメル地区に行った。距離は約5 km である。降り際に値段を聞くと2ドル(約260円)と言われた。11月7日にカトマンドウの市内観光をするためタクシーを4時間チャーターしたときは850ルピー(約1500円)であったので，これからすると高いように思えたが，大した金額でもないので要求されるまま支払った。

ショッピングの後，私だけ一足先にホテルに帰ることにした。歩いていると，タメル地区の出口でタクシーに乗らないかと勧誘されたので，そのタクシーに乗ってホテルまで返った。これまでに乗ったタクシーも日本では走っていないような古い乗用車であったが，このタクシーはことさらに古く，クッションも悪かった。5つ星の高級ホテルに出入りするタクシーに比べると，格がかなり落ちる。ホテルに着くと10ドル(1300円)という法外な値段をふっかけてきた。2ドルにしろと交渉したが，8ドル以下にはまけられないと言う。交渉しても無駄と思えたので，2ドルだけ渡しグッバイと言って車を降りた。運転手は文句を言うことなくそのまま去っていった。

9.4 ネパールの子供

(1)空港に群がる子供

カトマンドウの国際空港を出て，先ず驚いたのは，スーツケースをバスに運んでいるところに子供達が群がってきたことである。スーツケースをバスに積み込むのを手伝い，その後でチップを要求するのである。八木先生の奥さんは，子供の要求通り10ドルあげたと話されていた。十数人子供がいたので，みんなで分ければよいと思ったそうであるが，それでも高すぎる。カトマンドウのサラリーマンの月収は3,000~5,000ルピー(5,000円~8,500円)で，貨幣価値は日本のおよそ50倍になるそうである。

後でわかったことであるが，ネパール人はタクシーの運転手も物売りも最初10ドル(1,300円)を要求する。



ムグリンのバザール

(2)ペンを要求する子供

バザール(露店の並ぶ市場)など人々が集まるところにも多くの子供がたむろしている。そして，こちらが日本人観光客と見ると寄ってきて，「ペン，ペン」と言いながら手を差し出してきた。ボールペンを要求しているようであった。もらったペンは売ってお金に換えているようである。

カトマンドウからポカラに向かう途中，露店が並んだムグリンの町でトイレ休憩をしたときも少年が私にペンを要求してきた。それを見たネトラが，その少年に「物乞いをしてはだめだ。働いて買えるようにようにしないといけない」という主旨のことを言って諭していた。さすが，ネパール工科大学で先生をしていたことだけある。

(3)山の子供

ネパールはどこに行っても子供が多い。山の中でも集落があれば子供がぞろぞろしている。しかし，山の子供は，みすばらしい服装をし，草履に素足または裸足のままで歩き回っているが，町の子供達のように物乞いはしない。とても人なつこい。

ポカラでまだ薄暗い夜明け前に，日の出を見るためダンプの岡に登った。その時も，数人の子供が現れた。周囲が明るくなった頃には，子供の数は10名ほどに増えていた。朝方は寒く，気温は10℃以下に下がっていたと思うが，子供達は薄着のまま，素足で山を走り回っている。たくましいの一言につきる。



カトノドゥからボカラに向かう途中で出会った子供達



ボカラのダンプの山頂に集まってきた子供達

(4)物売りをする子供

カトマンドゥの観光地には、片言の日本語や英語で土産物売る子供や男が多い。バクタブルのダルパール広場に入るとすぐ10才くらいの二人組の女子が、曼陀羅の刺繍が入った小袋をもって、「買う」と言って寄ってきた。「買わない」、「いらぬ」と言ってもお構いなしに「安い、買う」と言いながらしつこくつきまとって離れようとしない。1枚1ドルだと言うので1枚買ってやると、今度はやはり曼陀羅模様の刺繍がついた財布を取り出して、「安い、買う」と言い出した。まあ、いいかと思ってまた1枚1ドルで買ってあげた。

王宮やトウマディー広場を見物し、元のダルパール広場に帰ってくると、最初に曼陀羅模様の袋を売りつけた女子が「10枚1ドル」と言ってまた売りに来た。観光客が帰ると見て一気に値段を下げてきたのである。10倍で買わされたと思う



バクタブルのダルパール広場で物売りをしていた少女



パタンのダルパール広場で物売りをしていた4人姉妹

と少し腹も立ったが、商売上手には感心させられた。

次の観光地であるパタンに来ると、バクタブルと同様に4人組の女子がしつこくつきまとい曼陀羅模様の刺繍の入った袋を売りにきた。4人姉妹とのことであった。彼女たちは学校に通うこともできず、生活のため必死に働いている。

(5)小学生

ネパールの教育制度は、1年生から5年生までが小学校、6・7年生が中学校、8年生から10年生までが高等学校となっていて、1年生から3年生までの教育費はすべて無料である。このため1年生の就学率は90%と高いが、多くの家庭は貧困のため、労働をしなければならず入学1年生で中途退学をする生徒が多いようである。

バクタブルのトウマディー広場やチトワン国立公園に行く途中で、水色のシャツにネクタイ姿の小学生を見かけた。しかし、空港にたむろする子供、観光地で物売りや物乞いをする子供、山の

中に住む子供など多くの子供達は、学校に通っているようには見えなかった。

9.5 働かないネパールの男達

家の前に椅子を置いて日向ぼっこをしながらタバコを吸っている男性、四角いテーブルを数人で囲み賭博に熱中している男性、たんぼで農作業をしている傍らでのんびり休憩している男性をあちらこちらで見かけた。ネパールでは男女で仕事の分担が決まっているのかもしれないが、女性がまめに働くのに比べ男性はあまり働いていない印象を受けた。

10. 車窓から見たネパールの風景

10.1 人口政策

近年の日本では、山間部に行くと老人の姿しか見えない。ネパールではどこに行っても子供を多

く見かけた。都市部では教育費がかかるため子供は二人くらいしか生まなくなったが、山間部では今でも農業の働き手が必要なため子供をたくさん産んでいる。これが、貧困の原因にもなっているようで、人口政策として「コンドームを使用しましょう」という意味の看板がハイウェイの至る所に設置されていた。



草を運ぶ女性達



バクタブルのトムマディー広場で遊ぶ小学生



のんびり休憩している男性達



チトワン近くの小学校



人口政策で避妊を奨励する看板

10.2 シラミ取り

道路沿いの家の前で、椅子に座った女性の長い髪の毛を、後に立ったもう一人の女性がまさぐっている光景を所々で見かけた。頭髮に繁殖したシラミを取り除いているのである。

10.3 棚田

棚田とは、山を開墾し斜面に階段状に作っ水田のこと。高知県梶原町に千枚田と呼ばれる棚田があり、こんな笑い話がある。「田植えを終えたお百姓さんが自分の田んぼを数えたところ一枚足りない。いくら探しても最後の一枚が見つからずに夕暮れを向かえ、諦めて帰り支度をしたところ、脇に置いた帽子の下に猫の額ほど小さな田んぼが隠れていた」。

ネパール各地にも猫の額ほどの小さな棚田がたくさんある。梶原町や石川県輪島の千枚田の比ではない。万枚田と呼ぶのがふさわしい。開墾が物理的に可能な斜面は全て水田になっており、何代にもわたる先人たちの苦勞、ネパール人のたくましさを実感させられる。

11. タンカとトピー

11.1 タンカ

ネパールの土産物の代表的なものにタンカがある。チベット仏教の仏画で、幾何学的図柄の曼陀羅や神々に囲まれた仏陀など様々な図柄が繊細に描かれている。

ネパールにはタンカを売る店がたくさんある。法外な値段を吹っ掛ける店もあると聞いていたので、店構えが立派なら信用できるだろうと考え、タメルにあったガウリ・ギリというタンカ専門店に入った。店頭に並べてあるのは安物のタンカで、高価なものは店の奥に展示されていた。店の奥には、タンカを広げるためのガラス板を載せた広い机が置かれており、ガラス板の下にはこの店の客の名刺が机一杯に敷き詰められていた。日本人の名刺も結構多くあった。



ネパールのタンカ(ガウリ・ギリというタンカ専門店のホームページからコピー)

希望する図柄とサイズを指定すると、「素晴らしい作品だ。天眼鏡でよく見てくれ」と言いながら次々に新しいタンカを出してきた。私にタンカを鑑識する能力は全くないのであるが、事前に、繊細に描かれおり、絵の具に金がたくさん使われていて、原色ではないくすんだ色調であるのが値打ちのあるタンカと聞いていたので、この点をチェックポイントにして選んだ結果、幅51cm 縦67cmの曼陀羅とブツダなどが描かれたものを買うことにした。値段は200ドル(26,000円)ということであった。値段交渉の末、20%引きの160ドル(約2万円)で手を打った。損をしたのか得をしたのかよくわからない。しかし、これだけの絵を描く労力を考えると安い買い物をしたと自分に言い聞かせることにした。

帰国後、高知の帯屋町の額縁専門店にタンカを持ち込み、それを額縁にはめ込んでもらった。店の馴染み客で、店主が先生と呼ぶ画家風の男性がタンカを見て、「ネパールで買った値段の10倍はしますよ。これだと30万円はするでしょう」と言われた。

海外旅行の土産で家族から喜ばれたものはほとんどない。「また変なものを買ってきた」と言われるのが常であった。しかし、土産のタンカが30万円の値打ち物と知った妻と娘が言った言葉は「もっとたくさん買ってくればよかったのに」。

11.2 トピー

ネパール人が被るひさしのない帽子がトピー。トピーには黒色で側面にバッジを付けたものと絵柄模様のもとのがある。ネパール人男性の国民的服装は、スルワルと呼ばれる膝から下がぴたりしたズボンにゆったりしたシャツのマエルポース、そして頭にトピーを被る。

シンポジウムで座長、副座長をされた方、特別発表をされた方には記念品といっしょに黒のトピーが贈呈された。トピーをもらった人は全員それを被って懇親会に出席するという話があった。そのとき、榎先生から、正式な被り方を聞かれた。トピーを被っている人を見ると、バッジの付いている位置が右左まちまちである。ネパール出身のネトラに聞くと、トピーの上面は傾斜しており、低い方が左になるように被るのが正しいという説明であった。しかし、現地の人を見ると必ずしもそうではない。ホテルのボーイはみんなトピーを被っているので正式な被り方を知っているはずである。懇親会の場で聞くと、トピーも普通の帽子と同じように前後があるとのことであった。私は、座長らがもらったものと同じようなトピーをタメル地区の帽子専門店で購入していたので、調べてみたが前後の区別はできなかった。

ポカラに行ったとき、ネパール工科大学の理事長が、ブルーバードホテルでツアーの全員に昼食をごちそうしてくれ、男性には絵柄模様のトピーをプレゼントしてくれた。トピーの内側を見ると、普通の帽子のようにシールが縫いつけられていた。シールを後にして被ると、傾斜した低い方が左にくる。ボーイの話もネトラの話も正しかった。

12. 巡 検

12.1 巡検コース

巡検コースは、カトマンドゥからムグリンを経由してポカラに至る総延長約 240km のプリティビ・ハイウェイ、ポカラとバイラアワの間を南北に横断する総延長約 180km のシッダ - ルタ・ハイ



プリティビ・ハイウェイから眺めた斜面崩壊



プリティビ・ハイウェイの崩壊

ウェイ、バトワールからナラヤンガードを経てムグリンでプリティビ・ハイウェイに連絡する総延長 160km のマヘンドラ・ハイウェイの 3 つの幹線道路である。

ハイウェイと言っても日本の高速道路とは全く異なっていた。単にアスファルト舗装をただだけの二車線道路。道路線形も悪いので、走行速度は 40~60km/hr 程度。マハーパラト山脈を横断するシッダールタ・ハイウェイは、くねくね道で勾配も急。舗装も簡易舗装の箇所が至るところにあり、何カ所かで舗装工事中であった。巡検をしながらであったが、ポカラからルンビニに到着するまで 12 時間を要した。ネパールにトンネルは一本もないと聞いていたが本当であった。

12.2 斜面崩壊

あちらこちらに斜面崩壊跡があった。ハイウェイ



カトマンドゥからポカラに向かうハイウェイの擁壁

この斜面でも崩壊跡が見られた。復旧工事は、練石積み腰擁壁を施工し、崩壊面に直接挿し木が行われているだけであった。日本であれば、アンカー付き法枠や吹付け法枠が施工されるか、編柵で法面を安定させておいてポット苗が植えられるところであろう。

12.3 擁壁

ハイウェイ沿いでよく見かけた擁壁は、練石積み擁壁、フトン籠を積んだ擁壁、コンクリート擁壁であった。中でも、写真のような練石積み擁壁が多かった。石を積み重ねながらコンクリートを打設し、積んだ石の間から前にこぼれだしたコンクリートをコテ仕上げして作っているようである。

12.4 橋梁

ネパールの巡検中に見た橋梁には、コンクリー



歩道用吊橋 (プリティビ・ハイウェイ沿い)



プリティビ・ハイウェイと分岐する道路の吊橋

トアーチ橋、ポストテンション方式 PC 桁橋、プレートガーダー橋、トラス橋、吊橋、斜張橋があった。

カトマンドゥとポカラを結ぶプリティビ・ハイウェイ沿いのトリスリ川には、主塔がない歩道用吊橋が多く架けられていた。トラス橋には、ポニートラス、ワレントラス、K トラスがあった。架設年代の古い橋はポニートラスで、緊急用仮橋のようであるが、れっきとしたハイウェイの永久橋であった。シッダ・ルタ・ハイウェイがガンダキ川を横断する地点に架設された橋は、橋長 91.7m の下路式曲弦 K トラス橋であった。

ポカラの中心地から北東に少し離れた地点にキエアイシン橋がある。これはセティー・ガンダキ川の支川に架けられたコンクリートアーチの水路橋で、水路の上下流側は歩行者が通行できる構造になっている。歩道から浸食によってつくら



ポカラのキエイシン水路橋(アーチ橋)



堰堤のように見えるのがプリティビハイウェイの路面



水路橋の隣に架けられたアーチ構造の道路橋



シッタ - ルタ・ハイウェイ沿いの砂防堰堤



シッタ - ルタ・ハイウェイに架かるガンダキ橋(1971年、橋長 301ft)

れた不思議な地形を見下ろすことができることから、この橋は観光地となっており、入場料として 10 ルピーを取っていた。この橋の直ぐ下流に架かっている道路橋もコンクリートアーチ橋で、その構造は大変美しいものであった。

12.5 砂防堰堤

プリティビ・ハイウェイ、シッタ - ルタ・ハイウェイ沿いには数カ所に砂防堰堤が建設されていた。いずれも道路際に造られており、堰堤の正面に流路工はない。このため、雨期には、沢に沿って流れ落ちてきた水や土砂がそのまま道路に流れ込み、通行不能になるだろうと思えた。

シッタ - ルタ・ハイウェイには、路側擁壁の上部が沢地形になっており、大きな転石がごろごろしている箇所があった。こんな道路を雨期に通行していると、転石が頭上から降ってきても不思議でない。

12.6 土木工事

ポカラのペワ湖近くの商店街で下水管を設置するための工事が行われていた。掘削やコンクリ



ポカラでの管理設工事



シッダ - ルタ・ハイウェイでの舗装工事



変わった種類の異形鉄筋



建築中の住宅(チトワン)

ート打設は全て人力で行われていた。鉄筋は、日本製のものとはリブの形状が異なっている。遠方から見るとワイヤーロープのようにも見える。丸鋼に細い鋼線が螺旋状に溶接されているためである。アメリカのワシントン州で見た異形鉄筋の断面は四角形であった。所変われば鉄筋も変わる、ということを改めて認識させられた。

ポカラからルンビニへ向かうシッダ - ルタ・ハイウェイを走っていると、道路の中央に直径 30cm ~ 50cm 大の岩があった。最初、落石かと思ったが、よく見ると等間隔で延々と並べられていた。ネトラは「誰かが意地悪をしたもの」と話していた。これはジョークで、舗装工事のため片側交互通行をさせる目的で設置したものであった。

舗装工事などの土木工事を所々で見かけた。日本のように作業員が作業服を着てヘルメットを被っているわけではない。普段着に裸足のままで

働いているため、誰が作業員で誰が見物人かの区別ができない。インドの作業員は、安全靴やヘルメットを支給しても直ぐに売ってしまう、という話を本で読んだことがある。ネパールも似たような状況なのだろう。

12.7 ネパールの住宅

ネパールの一般的な住宅は、柱と床、屋根が鉄筋コンクリートで、壁が煉瓦張りか板状の石をコンクリートで練り込んだ平屋か二階建てが多い。住宅の多くは、屋根から施工途中の柱が突きだしている。建築途中に資金が不足したのかと思ったが、それにしても数が多すぎる。どうも、将来、建築費用が貯まった時点で増築できるように配慮しているようであるが、柱から飛び出した鉄筋がかなり錆びているところを見ると、増築は夢に終わっているのではないかとと思われる。



屋根から柱が突き出した民家(ポカラ)



パラボラアンテナが立ったカトマンドウの民家



ルンビニに向かう途中の農村

ポカラでは、三階建ての豪邸ががたくさんあった。軍人が、イギリスやシンガポールなど海外に派遣された際に貯めた金で建てたものが大半のようである。ガイドのハリーさんは、公務員を辞め、群馬県の前橋市で昼は旋盤工として、夜はそば屋で6年間働いて金を貯め、カトマンドウ市内



ポカラの河岸段丘

に 3000m²(900 坪)の土地を 200 万円で購入し、500 万円の豪邸を建てたそうである。

カトマンドウで4部屋程度の小さい平屋1軒の値段は70万円程度。サラリーマンの平均月収は4,000ルピー(7,000円)で、食堂で食べるネパールの定食ダルパートが40ルピー(70円)、1DKの家賃が1,000~2,000ルピー(1,700~3,400円)。ネパールで一生涯懸命働いても一般市民が家を持てるのは夢に等しい。

裕福そうな家の屋根には、巨大なパラボラアンテナが立っている。ネパールには、放送局がネパールテレビNTVしかなく、朝2時間と夜4時間半しか放送されていない。このため、パラボラアンテナでインドや香港の衛星放送を受信しているのである。

山間部の農家には茅葺きやトタン葺きの物置小屋のような小さな住宅が多い。ポカラで日の出を見るためダンプスの山に登った時、民家の中を覗くことができた。食堂は土間のままであるが、壁によく磨かれたアルミ製の鍋や食器がたくさん掛けられていた。みずぼらしい服装はしているが、清潔好きなのかも知れない。

12.8 ポカラの河岸段丘

ポカラの町の東側を南東方向にセティ・ガンダキ川が流れている。その川の両岸は、凹凸がほとんどない平らな地形が形成されている。

上野氏の説によれば、水平な地面が元々の河床で、河川の中央部が徐々に洗掘され現在の地形が

形成されたとのこと。

しかし、昔、河床であったにしてはあまりにも平らすぎる。ポカラ盆地は大昔、湖であったが何らかの原因で水がなくなって盆地になり、その後浸食された、と考えるのは無理があるだろうか。

13. あとがき

ネパールは、私にとって全く関心のない遠い国であった。しかし、10日間の短い駆け足の旅ではあったが、一端を垣間見たことで急に親近感を覚える国になった。

11月24日(土)21時~22時30分NHK総合放送でドラマ・つま恋「私は誰？消えていく大切な思い出・進む病と闘う夫婦の絆」という芸術祭参加番組が放映された。

元・私立大学教授の陶子(松阪慶子)は、「若年性アルツハイマー」病に冒され、次第に記憶がなくなってゆき、日常生活もままならない状態になる。思い悩んだ末に離婚届を書き、家族に内緒でネパールに行く。それを知った夫の照於(大杉漣)が後を追ってカトマンドゥーに行き、陶子を探し回るというストーリーであった。スワヤンブナート、ボダナート、パタン、パシュパチナートなどの観光地やタメル地区など見覚えのある風景が次々と映し出された。

ネパール滞在中は、汚い不潔な国、観光客を騙そうとしたり物乞いをしたりする人々の多い国、という印象が強かった。しかし、今、振り返ってみれば、時間がゆったり流れ、病んだ心を癒す素晴らしい国であった。

旅の期間中、八木先生夫妻、榎先生夫妻、矢田部先生をはじめツアーの皆様には大変お世話になった。帰国後、稲垣さんからは地質に関する膨大な研究資料を、榎先生からはデジカメで撮影した画像を収録したCD-Rを送っていただき。また、上野さんからはポカラのホテルで一緒にお酒を飲んだ時に話題になった「空の旅の自然学(桑原、上野、向山共著)」(古今書院)という立派な写真集をいただき。皆様に心より感謝申し上げます。

本稿の執筆に当り「地球の一人歩き・ネパール」(ダイヤモンド社)、鈴木章弘他著「好きになっちゃったカトマンズ」(双葉社)を参考にした。掲載した写真は、筆者がカメラで撮影したもの、筒井君がビデオカメラで撮影したものの他に、榎教授がデジカメでお撮りになった写真も掲載させていただいた。

(2001.12.10)